

## 使徒言行録 18 章 12－23 節

### 「神の御心ならば」

今日の箇所も、パウロがコリントの町でもユダヤ人に襲われ、法廷に引き立てられて行ったことが記されております。ここまでは、今まで出会った困難と同じです。ところが、14 節以降でパウロに対するユダヤ人たちの訴えが退けられたのです。私はここに「主の守り」を見るのです。「わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。」との主の御言葉、主の約束の成就を見るのです。しかし「神の御心」があったと思いきや、17 節は、理解が難しいところです。「群衆は会堂長のソステネを捕まえて、法廷の前で殴りつけた。」と。急に標的がかわります。このソステネという名前は、新約聖書にはコリントの信徒への手紙一 1 章 1 節にもう一度だけ出てきます。もしかしたら、今日の箇所と同一人物だと思ふのです。この会堂長ソステネは、パウロを訴え、それを総督ガリオンに退けられ、そして群衆によって殴られるというひどい目にあった。しかし、彼は後にキリスト者になった。先週の会堂長クリスポに続いて、会堂長ソステネまでもがキリスト者になった。コリントでのパウロたちの伝道は、主の守りの中、大いに成果を上げたのであります。

パウロはこの出来事ののち、コリントを後にしました。エフェソの町は、アジア州の首都です。16 章 6 節にあるように、パウロはこの第二次伝道旅行の最初、アジア州での伝道を願っていたのです。しかし、それを聖霊に禁じられ、3 年ぶりにエフェソにたどり着いたのです。ここでの伝道は、ユダヤ人の反感をあまり買わなかったようです。しかも反応は悪くない。しかしパウロは人々の申し出を断り、さっさと船で出発してしまいます。ただここで、パウロはエフェソを後にするに当たり、とても印象的な言葉を残しました。21 節「神の御心ならば、また戻って来ます。」と。パウロにしてみれば、再び来たい思いは強くあったに違いありません。しかし、この第二次伝道旅行で彼が学んだことは、伝道というものは神様がその救いの御業を御自身で行われるのであって、自分たちはその御業にお仕えするだけだ、自分は神様の御業の道具、器なのだということを学ばせていただいたのでしょ。う。だからエフェソを離れるに当たり、「御心ならば、また戻って来ます。」と言ったのです。

私たちには、いろいろな思いがあります。願いもあります。しかし、すべては「御心ならば」なのでしょう。御心ならばそうなるし、御心でなければそうはならない。しかし、「御心」かどうかを知るといふことは、どのような結果が出ても諦めない、くさらない、投げやりにならないということなのです。「神様の御心のままに私を用いて下さい。」という、神様の愛と力に信頼し、その神様に自らの歩みをすべて委ねる、信仰の言葉なのです。「どうぞ私の上に御心をなしてください。」と願い、求めつつ、それぞれなすべき務めに励んでまいりたいと思います。